◆講座名	江戸のネコ歩き２ー江戸のミステリー
◆開催日（回数）	５月１４、２８日、６月１１、２５日、７月９日
◆曜日	土曜日
◆時間	１３：２０～14：５０
◆定員	３０名

◆講座内容

「就寝前にどんな本を読みますか？」。こうした質問に一番多かった答えは、ミステリーでした。たしかに、良質なミステリーは脳を適度に刺激し、心地よい眠りに誘ってくれます。コナン・ドイルのシャーロックホームズや、アガサ・クリスティのポアロ。昨年話題となった小池真理子『神よ憐れみたまえ』(新潮社)もミステリータッチの好編でした。文学不振の今、なぜミステリーが人気なのでしょうか。その理由と、魅力を江戸文学の中に探りたいと思います。

さかさまの幽霊、異人殺し、ペットの殺人、謎の誘拐事件、異郷でのふしぎな体験、日常生活の裂け目に顔を覗かせる一瞬の狂気。そして、なぜか哀しい西鶴のミステリー。西欧風の犯人探しゲームとは違う、江戸のミステリー。毎回テーマごとに選りすぐった作品を数編とりあげ、江戸人は何に興味を持ち、何を怖れたかを考え、その世界を堪能したいと思います。

五つのテーマを設定しましたが、現在『江戸怪談史事典』(国書刊行会)の編集が進行中です。最新の研究成果をふまえ、多少の変更があるかもしれません。お含みおき下さい。専門的な研究をふまえながらも出来るだけ分かりやすく、パワーポイントで画像も駆使し、豊かで奥行きのある江戸が再現できればと考えています。

本講座は「江戸のドレスコード１、２、３（江戸のネコ歩き）」の続編です。これまでの受講生はもちろん、初めての方も大歓迎です。一回完結方式ですので、お休みになっても支障はありません。お気軽にご参加下さい。昨年同様にネコ歩き(文学散歩)のコースもご紹介します。好奇心は若さのバロメーター。ミステリーに心をときめかせ、天気の良い日はネコ歩きを楽しみましょう。

変容する街、渋谷。本学の新図書館も２０２４年の開館に向けて、建設が進んでいます。箱根駅伝の優勝もあり、キャンパスは一層活気づいています。新緑の銀杏並木で、お会いできることを楽しみにしています。

◆目標、重点を置く学習内容

すぐには役に立たないものの、少しだけ人生を豊かにしてくれるもの。「教養」とはそうしたものかも知れません。二年にわたるコロナ禍は、その大切さを教えてくれました。好奇心は若さのバロメーター。「江戸」というワンダーランドに分け入り、江戸のネコ歩きを楽しみましょう。

◆受講対象者

どなたでも可能です。これまでの受講者はもちろんのこと、初めての方も大歓迎です。最新の研究成果を踏まえることで、予備知識をお持ちの方にもご満足いただける講義を心がけます。

◆参考図書(講師推薦図書・購入は任意)

毎回、プリントを用意します。参考文献も講義の折に、入手しやすいものを適宜ご紹介します。

◆受講に際しての注意事項など

・最少催行人数を設けております。最少催行人数に達しなかった場合には、講座を中止させていただくことがございます。
・講座の録音・録画・写真撮影は、ご遠慮ください。
・講義中は、携帯電話の電源を切るかマナーモードに設定してください。教室内での通話はご遠慮ください。

◆講座スケジュール（各回の講義予定）

回	日程	内容
1	5月14日	「幽霊」 『四谷怪談』のお岩さんや、『皿屋敷の』お菊さんは幽霊。水木しげるの『ゲゲゲの鬼太郎』は妖怪。それでは、幽霊と妖怪の違いはどこにあるのでしょうか。人はどんな時に幽霊になるのでしょうか。逆さまの幽霊や、足のある幽霊。幽霊にまつわるさまざまな疑問への答えを、選りすぐった作品を読みながら具体的に考えます。
2	5月28日	「動物と人間」 江戸は現代以上に人と動物の距離が近かった時代。ペット事情も違いますし、動物に絡む多くのミステリーがあります。狐や狸はなぜ人を化かすのか。化け猫。馬と少女の純愛。殺人を犯す犬や猿。そんな話をご紹介し、江戸人が動物とどう向き合ったのかを考えます。
3	6月11日	「異人と異郷」 「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」(川端康成『雪国』)。ここでいう「国境」は外国との境ではなく、「県境」を意味します。自由な移動が難しかった江戸期の人々にとって、他藩(県)は外国のような存在。そこは日本の中にある外国。その延長線上に隠れ里や龍宮もあります。江戸人が憧れたユートピアと、それを崩壊させるデストピア。文化人類学にいう、異人殺し。「ふしぎの国」に迷い込んだアリスさながらに、異郷をめぐるミステリーを楽しみます。
4	6月25日	「少女」 「息女（むすめ）化（け）して新婦（よめ）となり、娌(よめ)変じて姑(しうとめ)となり、姑妖(ばけ)て嫗(ばば) とな」(『世間娘気質』序・1717年)るとされる、女性の一生。「人はばけもの」(『西鶴諸国はなし』序)とあるごとく、人間は環境次第で何にでも「化ける」不安定な存在。その典型が「少女」です。小椋佳が「白い陶磁器」にたとえた少女期(「白い一日」)。振幅の大きい少女期にはさまざまなドラマがあります。異人を殺す少女や生き胆を奪われる少女。少女をめぐる数々のミステリーを読み、人間というふしぎな存在について考えます。
5	7月9日	「市井にひそむ悪一人が化物になる時」 「いつもの自分ならあんな行動はしないのに、なぜしてしまったのか？」。犯罪とは関係なしに、そう後悔したことはありませんか(私などは日々後悔です)。江戸期には「不測(ふしぎ)」という用例がありますが、充分に測りがたいのが人の心です。朝に殺人を犯しても昼には溺れている人を救助するという、ふしぎなメンタリティ。最大のミステリーはやはり、人の心。人はなぜ悪に走るのか。平凡な一市民が化物となるのは、どんな状況なのか。高精度カメラのような動体視力でその一瞬をとらえる文学。拾得物を横領した男の心に芽生えた欲望の発酵過程や、幸せな結婚生活を捨てた人妻たちの「不測(ふしぎ)」を考えます。

◆補講日　7月16日

◆講師紹介

篠原 進　青山学院大学名誉教授
専門は日本近世文学、メディア論。主な著書は『新選百物語』（監修・白澤社・2018）。共著『ことばの魔術師　西鶴』（ひつじ書房・2016）。「二つの笑いー『新可笑記』と寓言」（『国語と国文学』2008年6月）。コメンテーター「ヒストリア　井原西鶴」（NHK 2012 年3月）。同「BS歴史館　井原西鶴」（同2012年5月）。